

「トピックス」 令和8（2026）年度

第7回 「流鏑馬（やぶさめ）」と文化伝承

～安芸太田町の未来へつむぐ宝～

10月4日、堀八幡神社で執り行われた「流鏑馬神事」に来賓として参加しました。

秋の澄んだ空気の中、古式ゆかしい装束の射手が馬にまたがり、約140メートルの馬場を一気に駆け抜ける。馬蹄の響きと、疾走する馬上から放たれた矢が的を射抜く一瞬一瞬に、長い年月を超えて受け継がれてきた歴史の重みと人々の誇りを感じました。室町の時代から続く騎射の文化が、今まさに目の前で息づいていることに大きな感銘を受けました。

鎌倉時代に起源を持つ堀八幡神社の流鏑馬神事は、室町時代の永享11年（1439年）に記録・伝承が確立されたと伝えられています。広島県内で唯一残る本格的な流鏑馬神事であり、県の無形民俗文化財にも指定された、本町が誇るかけがえのない歴史的文化遺産です。

しかし私が強く感じたのは、「これほど価値のある文化財を、これから誰が、どのように守り、伝えていくのか」という課題です。

文化財の「伝承」とは、昔の形をそのまま残すことではありません。そこに込められた人々の願いや祈り、地域の歴史を知り、その価値を自分たちのものとして次の世代へ手渡していくことです。流鏑馬を支えているのは射手だけでなく、準備や神事を支える人、地域で見守る人、そして歴史を守ってきた多くの先人たちです。今日の流鏑馬があるのは、地域の力が途切れることなくつながってきたからにほかなりません。

ここに、教育の大きな役割があります。

子どもたちが地域の文化に触れ、「すごい」「カッコいい」と感じ、その感動から「なぜ続くのか」「誰が守ってきたのか」と問いを深める。教科書の中だけではなく、自分の目で見て、肌で感じる体験こそが郷土への愛着や誇りを育てます。堀八幡神社には流鏝馬のほか、安政４年（1857年）に造られた巨大な自然石燈籠もあり、動的な無形文化財と静的な有形文化財が共存する地域の奥深さを物語っています。

学校教育にとどまらず、流鏝馬、神楽、三段峡の自然、井仁の棚田、筒賀の大銀杏など、本町が持つ豊かな文化資源を地域全体の学びへとつなげていくことが大切です。これらを一つひとつつなぎながら、「安芸太田町だからこそできる学び」を育てていきたいと考えています。

「文化財は過去からの贈り物であると同時に、未来への預かり物である」
私たちが受け取ったこの貴重な文化を次の世代へ、そしてその次の世代へ。教育委員会として、町民や地域の皆様とともに、文化を守るだけでなく、子どもたちがふるさとを知り、誇りを持ち、地域の未来をつくる一人となっていく「文化の継承」と「人の育ち」を大切にしていきたいと思います。

10月4日に感じたあの馬蹄の響きと矢が的を射抜く音を未来の子どもたちにも届けるために、このかけがえのない「安芸太田町の宝」を、ともに未来へつないでいきましょう。

安芸太田町教育委員会 教育長 大野 正人